

農政の動き 2016年12月9日～12月20日

◇搾乳牛1頭当たり生産費は73万6480円◇

農林水産省は、2015年度の全国の搾乳牛1頭当たりの全算入生産費について、前年度比3.8%減の73万6480円だったと発表した。副産物価額(子牛価格)の増加や飼料価格の低下などが要因。肉用牛子牛の生産費は0.9%減の59万340円で、もと牛価格の上昇に伴い、肥育牛は8.0%増の107万751円となった。また、乳用雄育成牛も6.1%増の16万6920円で、乳用雄肥育牛は1.7%増の46万7265円、交雑種育成牛は2.5%増の29万1994円、交雑種肥育牛は5.9%増の75万2089円となった。(12月9日)

◇「協同組合」が無形文化遺産に登録◇

J Aや生協などで構成される「日本協同組合連絡協議会」(J J C)は、「協同組合」が国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産に登録されたと発表した。(14日)

◇農薬使用に伴う事故11年以降最多◇

農林水産省は、2015年度の農薬使用に伴う人的事故の被害者数は、前年度比25人増の65人で、11年以降最多だったと発表した。同省は、(1)農薬や残さなどを飲料品の空き容器などに移し替えない(2)農薬を飲料物と分けて保管(3)土壌くん蒸剤の使用時は、適正な厚さの資材で完全に被覆する——など事故防止対策の徹底を呼び掛けている。発生件数は1件減の28件で、死亡事例は2件増の7件(7人)、中毒事故は22件(58人)(重複を含む)。内訳は「保管管理不良、泥酔などによる誤飲誤食」が11件で最も多く、被害者数では「農薬使用後の作業管理不良」が20人(3件)で最多だった。(16日)

◇MA米落札価格キロ156円で最低水準◇

政府は、不透明な取引実態の判明に伴い中止していたミニマムアクセス(最低輸入量、MA)米にかかる売買同時入札(SBS取引)を再開した。2016年度第2回の入札結果は、予定数量の3万トに対し、1万1384トを落札された。落札価格は、取引量が最も多かった米国産うるち精米中粒種でキロ156円と過去最低水準に下落した。取引の透明性確保に向けて、業者間の調整金のやりとりが禁止されたことなどが要因とみられ、実際には輸入米と国産米に大きな価格差があることを示す格好となった。(16日)

◇鳥インフル防疫徹底と早期発見を◇

農林水産省は、新たに宮崎県川南町の養鶏場(肉用鶏・約12万羽)で高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜が確認されたと発表した。11月28日以降、新潟県(2例)、青森市(2例)、北海道に続き、6例目。同省では家きん飼養農家を含む畜産関係者に対し、飼養衛生管理の徹底を呼び掛けるとともに、異常家きんの早期発見に万全を期すよう求めている。なお、同病がまん延している韓国では、今季の殺処分羽数が、364農場で1790万5千羽に及んでいる。(19日)

◇1～3月期の配合飼料価格1950円上げ◇

J A全農は、2017年1～3月期の配合飼料供給価格を、16年10～12月期に対し全国全畜種

総平均でトン当たり約1950円引き上げると発表した。引き上げは3期ぶり。トウモロコシや大豆かすのシカゴ相場の値上がりや円安傾向などを反映した。(20日)